

## 第2章 銃後

銃後の暮らし②【北海道・札幌】

# 夜も真っ暗にしていた家の中

辻 悟郎さんのお話から

○盧溝橋事件 一九三七年七月七日、北京郊外の盧溝橋付近で起こった中国北部駐屯の日本軍部隊（関東軍）と中国軍との武力衝突。この事件をきっかけに、日中戦争が始まった。

○召集令状（赤紙）  
人を軍に呼び集める命令書。あわい赤色の紙を用いたので、「赤紙」という。

○将校 軍隊において、部隊を指揮する権限をもつ、小尉以上の軍人。  
軍隊において、戦闘の指揮をする士官。少尉以上の武官。

昭和二年に札幌の中央区で生まれた私は、青春時代がずっと戦争中でした。昭和十二年の盧溝橋事件をきっかけに、大きな戦争になっていったのですが、昭和十六年（一九四一年）には真珠湾攻撃が行われたため、とうとう太平洋戦争に拡大されました。ちょうど私が中学二年の十二月八日でした。朝の七時にラジオの臨時放送があつて戦争が始まったことを知りました。忘れられない思い出です。

昔の国民の三大義務というのは、兵役の義務、納税の義務、教育の義務でした。この兵役の義務というのが今と違うところです。日本男子は、満二十歳になると徴兵検査を受け、甲、乙種が合格者ですが、体格の良い甲種は必ず現役入営します。それには、赤紙は必要ありません。赤紙の「召集令状」というのは、兵力が不足してきた時に残っている兵籍のある補充兵などの男子を集めるためのもので、いつ召集令状がくるのか分からなかったのです。

出頭することになると、みなで「祝出征」と書いた旗を掲げてお祝いです。本当は悲しくてたまらないのだけれど、そういう態度を見せると非国民といわれるので、みんなそんな態度は見せられないのです。顔ではうれしそうにしなければならなかったけれど、みな心の中では泣きながら出征したのです。

私の兄二人も戦争に行きました。二十四歳の上の兄は将校で、樺太へ部下の兵隊を二百人連れた輸送指揮官でした。兄さんは二人とも無事に生還し、家に戻ってきてくれました。その時は本当にうれしかったです。でも、私と同じ年の友も志願して戦争に行った人がいましたが、

何人か亡なくなった方もいました。十代の若わかさで、戦争で命を落としているのです。戦争のない時代に育ったみなさんは幸せだと思います。

ところで、当時の子どもの遊びはというと、女の子はおままごとやあやとりでしたが、男の子は、やっぱり兵隊ごっこが一番多かったです。私も今の大通公園で兵隊ごっこをやりました。みんなが立派な兵隊になることを目指していました。

子どもの遊びは、他に野球やかくれんぼもありました。先生が熱心で全校で野球大会をやりました。その時私は、キャッチャーをやりました。野球では英語を使うことができませんでした。それは敵の国の言葉は使つてはいけないという理由でした。ストライクは「いいたま」、ボールは「わるいたま」そんな表現しかできませんでした。

食べ物や着るものを買う時には、配給制せいといって、それぞれの家に切符きっぷが配られて、その切符きっぷをもっていないと買えませんでした。お金をいくらも持っていてもだめなのです。作る工場が壊されるなどして、品物不足だったからです。

服も簡単かんたんには買えませんでした。みんな学生服を着ていましたが、ほとんど兄からのお下がり、ひじやひざが抜ぬけた継つぎはぎだらけの服を着ていました。ティッシュペーパーなどありませんでしたから、みんな鼻水をそでで拭ふくので、そで口はテカテカでした。そして衣服の胸むねのところには自分の名前と住所と血液型けつえきがたを書いた布ぬのを縫ぬい付けていました。いつ空襲くうしゅうがあつて怪我けがをするかもしれないからです。髪型かみがたもみんな坊主頭ぼうずあたま



イメージ図

しょうしゅうれいじょう  
召集令状 (赤紙)

夜も真っ暗くろにしていた家の中

でした。長髪の子どもなんていませんでした。どの家にもバリカンがありました。

食べ物では、甘いものもあまりなくて、魚や野菜も足りなくて、全部「配給」でした。学校は給食ではなく、みんな弁当でした。でも中身が見えないようにかくして食べていました。家庭によって収入も違い、食べるものも違っていたからです。

当時は、働き手の若い人はみんな戦争に行ってしまったっていいないで、学生たちが農家に泊り込みで仕事を手伝いに行きました。援農といえます。沼田や江部乙とかかなり遠くまでも行きました。田植えや刈り取りなど、なれない仕事ばかりさせられました。でも、手伝い先が農家なので、白いご飯、「銀シャリ」といいましたが、それを食べることができてうれしかったです。帰りには少しのお米を持たせてくれ、家に持って帰ると、とにかく食べるものがない時代でしたから、母がとても喜んでくれた思い出が残っています。

○勤労働員 労働力不足  
にもなつて、学生・生徒を軍需産業に動員して、工場などで生産に当たらせる政策がとられた。

勤労働員にも行きました。丘珠飛行場の滑走路を作る手伝いに行きました。スコップを持って土掘りをしたり、大きな一・八メートルくらいの板を一人一枚ずつしよって、丘珠のはずれまで運びました。遠くから見るとアリの行進みたいだったようです。その板をたくさん敷いて滑走路にしたのです。それが現在の丘珠空港です。

戦争も末期になると空襲もありました。一度だけ B 29 が飛んできましたが、すごく大きい飛行機で東から西へ飛んでいったのを見てとてもびっくりしました。札幌では、丘珠空港がねらわれて、機銃掃射の弾があたり、丘珠の農家の男性一人が死亡し、息子さんが負傷しました。いつアメリカの飛行機



灯火管制

イメージ図

○憲兵 本来は軍人に対する警察官。一八八二年、憲兵条例が制定され、一八八九年、全国を統括する憲兵司令部が置かれた。しかし特に治安維持のための警察任務を担ったため、一般国民の捜査・逮捕の権限をもち、取り締まりにあたった。

が飛んでくるかわからないので、灯火管制といって真夏の暑い日も窓際に暗幕を張って、明かりが漏れないようにいつも家の中を真っ暗にして夜をすごしました。光が漏れると町内会の役員さんが注意をしてきました。町の中も真っ暗。歩くにも大変でした。夜、大通公園で歌を歌いながら歩いていると憲兵さんにとても怒られました。とても怖い時代でした。空襲では、石狩の当別の油田が機銃掃射を受けました。また、室蘭とか函館、留萌、釧路などの港はずいぶん攻撃され、港やその周辺にある工場などが破壊されました。それは、戦争に使うものを造る工場だからです。

昭和二十年四月、沖縄にはアメリカ軍が上陸して、一般の市民も巻き込まれて悲惨な状況になりました。八月六日と九日には広島と長崎に原子爆弾を落とされました。それをきっかけに八月十五日には終戦になり、天皇陛下の玉音放送というのをラジオで聞きました。人々は、陛下の声を初めて聞きました。

今までお話した時代のこと、みなさん嫌だと思ってくれればうれしいです。つらく苦しい時代でありました。

戦争中も、戦争が終わってしばらくも、本当に大変でした。みんな助け合って生きなければならぬ時代だったんです。今を生きるみなさんも、命を大切にしてください。戦争を二度と起こしてほしくはありません。絶対に。平和な時代が絶対いいのです。これからのみなさんは、きちっと生きて立派な生活を送って、戦争が起こることがないように信念をもって生きていってください。

DATA

平成20年度東区平和事業  
聴き取り  
・平成20年10月10日  
栄小学校  
・平成20年12月5日  
栄町小学校



辻 悟郎(つじ・ごろう)さん

・昭和2年(1927年)生まれ  
・札幌市東区在住